

## E-6

**発表題目：**日本語における新しい認知類型論的試み—話し手の言語化形式をめぐって—

**発表者氏名：**佟一（トン イ）、盧濤（ロ トウ）

**要旨：**話し手が言語化されるのが普通の言語と、言語化されないのが普通の言語（e. g. “Where am I” / 「ここはどこ」）の、それぞれの認知類型論（cognitive typology）上の解釈として、〈主観的把握〉 vs. 〈客観的把握〉という考え方（池上 2016）や、〈事態外視点〉 vs. 〈事態内視点〉という考え方（町田 2012）などが挙げられる。〈主観的把握〉と〈事態内視点〉は、日本語で多用される話し手非言語化表現を説明するには問題ないと思われるが、共に理論的関心を話し手非言語化の問題に傾けすぎる傾向があり、話し手が実際に言語化される場合はどう解釈すれば良いかは問題として残っている。しかも、話し手が言語化される場合には、日本語なりの特殊性が見られるため、〈客観的把握〉や〈事態外視点〉で説明することも難しい。本発表では以上の問題を説明できるモデルを探るべく、〈主観的把握〉と〈事態内視点〉の考え方を批判的に継承した上で〈メタ的把握〉というモデルを提出し、それを以て日本語における話し手の言語化形式の認知類型論的解釈を行う。

### 1 問題提起

認知類型論（cognitive typology）とは、従来の言語類型論の限界を考慮した上で、「類型論的に異なる文法的特徴を有する言語間の構造的相違点・類似点を、その背後にある、当該言語間の社会・文化的側面を含めた広義の認知・伝達様式（認知スタイル）及び伝達慣習（コミュニカティブ・プラクティス）の相違・類似と関連させて解明しようとする学問分野」である（堀江 2019）。そして、池上(2000)が提唱する〈相同性〉(homology)という概念が、認知類型論とは大きな共通点が見られる。池上(2000: 77-84)は〈相同性〉を、「言語構造（あるいは文化システム）間に傾向として見られる構造的並行性」と定義し、「〈相同性〉は、芭蕉[...]によると、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、その貫通するものは一なり」ということ[...]この仮説を踏まえての検証を通して、人の〈こころ〉がさまざまな分野を横断していかに統合的に働くかを確認することができるはずである」と述べている（池上 2009）。認知類型論と〈相同性〉両方の定義を併せて見ると、認知・伝達様式を究明するためには、少数のカテゴリーに拘らず、可能な限り複数の異なるカテゴリーを横断する構造的並行性を探る、という基本的な研究方法を採るべきことがわかる。

そして、話し手（Langacker の認知文法における C（conceptualizer、概念化主体）にほぼ相当する。以下では話し手を S、聞き手を H とそれぞれ略称する）が言語化されるのが普通の言語と、言語化されないのが普通の言語（e. g. 「Where am I」 / 「ここはどこ」）の、それぞれの認知類型論上の解釈として、S は自らの分身を事態の中に残したまま事態の外部に分裂し、自らの分身を傍観する“主客対立”の〈客

観的把握)と、Sは自らを事態の中に置く“主客合一”の〈主観的把握〉(池上 2016)という考え方や、Sは事態の観察者と参与者に分裂される〈事態外視点〉と、観察者と参与者が一体化する〈事態内視点〉(町田 2012)という考え方などが挙げられる。これらの考え方自体は「認知類型論」という用語を明白に用いていないが、その理論的展開及び運用から見て、認知類型論的な性格があるのは明らかと言えよう。

〈主観的把握〉といい、〈事態内視点〉といい、日本語で多用されるS非言語化表現を説明するには問題ないと思われるが、問題はS言語化はどう解釈すれば良いかである。しかも、日本語におけるS言語化は、形式的には①と②など日本語なりの特殊性が見られるため、〈客観的把握〉でもまた説明しにくいところがある。

①Sの形式は多様かつ情報付きのもの(e.g. 「わたし」「わたくし」「俺」「僕」「あたし」etc.)であり、英語の「I」とは異なる。

②(1)(2)(3)のように、S自身を客体のように言語化する表現がある。これらは共に中国語と英語に見られない現象である。

(1) この俺が負けただと？

(Sは「この」と共起する)

(2) 予想外の出来事にどう対処していいのかわからない自分がいます。

(Sは「いる」と共起する)

(3) 俺は、このカードに賭ける！

(Sが強く発音された後、音声的休止が挿入される)

以上に踏まえて本発表は、日本語の認知類型論の新たな試みとして、〈メタ的把握〉という認知様式を提出したい。

## 2 〈メタ的把握〉のモデル

〈メタ的把握〉の論理は以下の通りである。Sの認知世界の中では、まず“自己”が、“自己”以外の全てとは異なる特別な存在として立ち現れる。そして、認知的負担を軽減するため、“自己”以外の全ては、抽象化された一団として捉えられる。この萬物の抽象的集合体を、W(world)と呼ぶことにする。“自己”は“此岸”の絶対者となり、Wという“彼岸”を傍観する。一方、“自己”もまたWの一部であると認識される。つまり〈メタ的把握〉では、Sは自らの分身を、Wの外部から内部へと分裂させると

いう自己分裂が発生することになる。Wの内部へと分裂されたSの分身を〈話者〉、Wの外部に絶対者として存在するSを〈メタ話者〉と呼ぶ。

〈メタ的把握〉と〈主観的把握〉及び〈客観的把握〉のそれぞれの主な相違点は、以下の通りである。

① 〈メタ的把握〉と〈主観的把握〉との主な相違点は、〈主観的把握〉は“主客合一”であるが、〈メタ的把握〉では、〈客観的把握〉と同様に自己分裂が発生し、“主客対立”である。但し、〈メタ的把握〉における“客観”とは、〈客観的把握〉における個体論理に基づいた“客観”ではなく、“客観”の集合体であり、Sの〈見え〉とS自身が別々に把握される。② 〈メタ的把握〉と〈客観的把握〉との主な相違点は、〈客観的把握〉ではSは自らの分身を事態の中に残したまま事態の外部へと分裂するが、〈メタ的把握〉では〈メタ話者〉が〈話者〉たる自らの分身をWの内部へと分裂する。つまり自己分裂の方向が逆に近い。

両者の違いを図3のように図示化できる。図3aでは、Sが自己の元々の存在場所に自らの分身（白い人の形）を残し、事態の外部へ分裂し、事態を自らの分身を含めて傍観する。矢印は自己分裂とSの事態外への移動を表す。図3bでは、Sが最初からWの外部にあり、自らの分身をWの中に分裂させるが、その分身（〈話者〉）とSの〈見え〉が別々に把握され、それらを外部でまとめる高次的なSは〈メタ話者〉である。

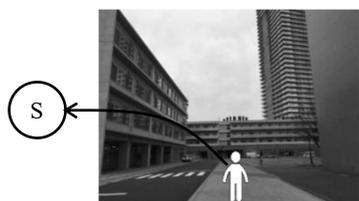


図 1a 〈客観的把握〉

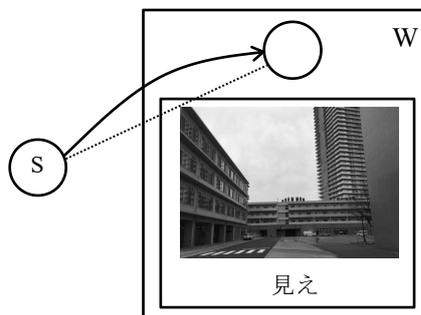


図 1b 〈メタ的把握〉

〈メタ的把握〉には複数の特性や効果があるが、本発表の内容は主にSの言語化形式を巡るため、“〈話者〉の客体性”という効果だけについて述べることにする。〈メタ話者〉はWに異なる〈話者〉を分裂させ、これらの〈話者〉を傍観するわけであるため、〈話者〉は客体的な性質を持つ存在である。そして、全ての表現可能な概念内容はWにあるため、〈メタ話者〉が表現不可な存在となり、〈話者〉は何らかの概念内容が付加された形として立ち現れる。

### 3 日本語におけるSの言語化形式

前節で紹介した〈メタ的把握〉のモデルの理論的規定から分かるように、〈メタ話者〉は言語化されないため、Sの言語化形式は実は〈話者〉の言語化形式ということになる。その内容は複数のカテゴリーを含むが、これは第1節で述べた認知類型論と〈相同性〉の研究方法に一致する。

まず、〈話者〉の客体性により、(1)(2)の論理は簡単に説明することができるが、少し説明が必要と思われるのは(3)である。(3)のような用法は、英語と中国語における一般的な一人称代名詞である「I」と「我」には基本的に許容されない。しかし、(4)(5)が示しているように、中国語の場合では、「朕」や「都督」など一人称代名詞の性質と特定の身分や地位を示す機能を併せ持つ言語ユニットの場合は、そういう用法が可能になることがある（日本語訳は筆者による）。

(4) 论你的功业和人品，朕，想赏你都不知道赏些什么。（康熙王朝）

（日本語訳：そなたの功業と人柄では、朕は、そなたに何を賞すべきか迷ってしまう。）

(5) 你们折损了主公七万精锐，日后定当斩杀七万蜀军，否则，本都督，两罪并罚。（三国志スリーキングダム）（日本語訳：主君の七万の精鋭を失ったそなたたちは、これから蜀の兵七万を斬るのだ。さもなくば、この都督は、二つの罪でまとめて処罰するのだ。）

(4)(5)における「朕」「都督」を「我」に言い換えると、音声的休止を挿入できなくなる。この現象を解釈すること自体はそれほど難しいことではないと思われる。即ち、身分や地位を示す言語ユニットで自称することは、Sがその身分や地位を有している自己を客体として見ていることであり、音声的休止を挿入することによって、Hに対してその身分や地位が意味するものを強調し、一種の威厳を演出する効果が生じると考えられる。ならば、日本語では普通の一人称代名詞にもこの音声的操作が可能ということ、Sが常に自己を客体として見ていることを意味すると考えられる。

次は〈話者〉の能記について分析してみる。一人称代名詞は〈話者〉の能記の重要な部分を占めていることは言うまでもないが、〈話者〉の客体性の効果により、〈話者〉の能記と一人称代名詞は同一概念ではないことがわかる。本発表では紙幅を考慮し、とりあえず議論の対象を一人称代名詞に絞っておく。周知のように、日本語における一人称代名詞は多様であり、しかも英語の「I」のような専らSを指すための言語ユニットではなく、他の一般的な意味を持つ言語ユニットの転用からなるものが多い。これは〈話者〉の客体性効果によるものだと考えられる。〈話者〉は〈メタ話者〉から分裂された、Wの中に一種の客体として立ち現れるため、一般的な意味を指す既存の言語ユニットを借用して指すようになっていると考えられる。

この過程をわかりやすく示している例がある。(6)は、ある愛猫家が飼っている「もち」という猫の動画に付けている解説であり、その話法に興味深い特徴が見られる。

(6) […]揺れ始めた瞬間、とんでもない速さでお逃げになりました。普段大人しいもち様がいざとなると、あんなに速く動けるのかと下僕驚き。もち様は初めての地震体験だったので、想像できないほど怖かったのでしょう […]落ち着けるように、下僕が首をさするも、まんまる目&イカ耳のまま […]もっと頼れる下僕にならなくてはと […]やっとう警戒を緩めて膝の上に来たもち様 […]疲れ果ててしまわれた様子。(https://www.youtube.com/watch?v=fxVHQAhH4gk)

下線部に注目すると、(6)の話法には、Sが一貫して猫を「様」で呼び、尊敬語で言語化し、自身を「下僕」で指す、という特徴が見られる。ここではSが一種の幻想的な上下関係を演出していることが分かる。この幻想的な上下関係の中で、Sが「下僕」を借用して自称することにより、「下僕」は一時的に一人称代名詞の役割を担うことになる。つまり、“本物の”S(〈メタ話者〉)は、この場面での一時的な自己を、Wに客体として存在する一人の「下僕」と捉えているということになる。

以上の分析を踏まえて、改めて日本語の場合を振り返ってみると、「私」「俺」「僕」など一般的な一人称代名詞も、身分とは異なるものの、やはり何らかの形で客体として存在するという結論にたどり着けると思われる。

〈話者〉の客体性をより鮮明に反映しているのは、「自分」という一人称代名詞である。〈メタ話者〉の傍観という概念を最大の意味で見れば、概念内容が付与された〈話者〉があれば、付与されていない〈話者〉があってもおかしくないということになる。そして、「自分」は後者だと考えられる。廣瀬(1988)は英語の一人称代名詞には「I」という公的表現が一貫しているのに対して、日本語では「自分」は私的自己を表すが、他の自称詞は公的自己を表すとしている。筆者は、「自分」は日本語における一貫的な一人称代名詞である点で英語の「I」と並行しているという廣瀬氏の主張に賛成するが、〈メタ話者〉の傍観という概念を用いるのならば、「自分」を概念内容が付与されていない〈話者〉と規定すれば良いわけである。この規定では、私的自己と公的自己という概念が必要なくなり、わざわざ英語の「I」について私的自己と公的自己の区別の適用性の問題を考える必要もない。簡単にまとめると、〈客観的把握〉優勢の英語では、Sは分身を事態の内部に残したまま外部に分裂された後分身を傍観するため、分身は「I」であるが、〈メタ的把握〉優勢の日本語では、Sは分身をWの内部へと分裂させた後それを傍観するため、分身は「自分」になっている、ということである。

#### 4 まとめ

本発表は〈メタ的把握〉のモデルとそれが持つ〈話者〉の客体性効果を説明し、それを以て話し手と共起できる言語ユニット、話し手の直後に音声的休止を挿入する現象、一人称代名詞の全体的構造、一人称代名詞「自分」の論理など、日本語の話し手の言語化形式を簡単に分析してみた。〈メタ的把握〉は本発表で触れた内容に限られるのではなく、「を」「は」「が」などの助詞、「られる」構文、授受構文など、日本語の多くのカテゴリーを横断する〈相同性〉を解釈するためのモデルを目指しているが、まだ構築中であるため、専門家の方々のご意見を頂いた上で、細部の理論的規定を修正する可能性が十分あることを、予め断っておきたい。

#### 引用参考文献一覧

池上嘉彦(2000)『「日本語論」への招待』講談社.

池上嘉彦(2009)「人文学研究における作業仮説としての〈相同性〉」『英文学研究支部統合号』  
2(0). pp:421-435.

池上嘉彦(2016)「〈視点〉から〈事態把握〉へー〈自己ゼロ化〉の言語学と詩学」『外国語学研究』17. pp:1-11.

堀江薫(2019)「発話場面を切り取る文法的手段の類型ー「現実嵌入」の観点より」『ひつじ研究叢書〈言語編〉第148巻 場面と主体性・主観性』 pp:39-63.

町田章(2012)「主観性と見えない参加者の可視化ー客体化の認知プロセスー」『日本認知言語学会論文集』12. pp:246-257.